かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

八 尋 分 教 会
大正３年10月31日　設立

陽気ぐらしを目指して、たすけの輪を広げよう

今一手一つに、一歩一歩！
＊一教会、初席者一名以上
＊おさづけを身近に
＊百万件のにをいがけ

一人ひとりの信仰生活の充実　～プラスαを目指して～
＊教会に参拝し、おぢばの理を戴こう
＊心を込めておつとめをしよう

創立百三十周年記念祭並六代会長就任奉告祭
立教184年（2021年）10月24日 執行

立教184年
2月号

大教会長様おはなし

ぢば一つに心を寄せ、声掛けに励もう!!

1・20年頭会議において

立教184年大教会年頭会議は、1月20日午後2時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会長・布教所長らが参集した。

大教会長様は、記念祭に向かう三年千日活動仕上げの年に入った年頭に当たり、その活動目標と2つの実践項目を述べられ、「当たり前」のことのように思われる各項目について、「今、正に、時代に求められている歩みだ」として、親神様・教祖、ぢば一つに、しっかりと心を繋ぎながら、一つひとつのことに、意味を持たせ、心を配り、大切につとめて、実践に取り掛かりたいと述べられ、特に、「声掛け」の大切さを強調して、仕上げの年＝今の時旬に相応しい歩みを促された。

なお、恒例の会食はコロナ禍のため中止。あいさつの要旨は次の通り。

立教184年、明けましておめでとうございます。

旧年中は、記念祭に向けての三年千日の2年目として、それぞれつとめました。大変、ご苦労さまでした。

いよいよ仕上げの年、精一杯、頑張りましょう。

▼真柱様 年頭あいさつ

先ず、『天理時報』に掲載された、本部での年頭のごあいさつを読みます。

一同を代表して中田善亮（ぜんすけ）表統領が、真柱様に新年のあいさつを申し上げた。

その中で、新型コロナウイルスの感染拡大や、次々にお見せいただく親神様のお急き（せ）込みにふれ、いまこそをやの思召を真っすぐに受けられるよう、ひながたを手本に思案を重ね、陽気ぐらしの道を堂々と歩める基本づくりから再出発するときだとして、「まずは、ここにいる者一同が、一手一つに心をそろえ、勇んで通りきらせていただく」と決意を述べた。

これを受けて、

真柱様は冒頭、新年のあいさつを述べられ、新型コロナウイルスの感染が拡大する中での昨年1年間の一同のつとめをねぎらわれたうえで、ご自身の体調の経過について「ぼちぼち動けるようにはなっております」と話された。

続いて、昨年はコロナの影響により、いままで当たり前のようにしていた行事ができず、月次祭はもとより、記念祭、奉告祭などの祭典も当初計画していたようには勤められなかったことに言及。また、二つの台風が続けてやって来る中で、二つ目の台風が大型のまま接近すると騒がれたものの、それほど発達することなく予想進路からもそれる結果に終わったことにふれ、「コロナにせよ、台風にせよ、私はそこに、親神様の力の大きさを見せつけられたように思う。私たちのつとめは、その親神様のお力を頂かないことには進めていくことができない。そう考えたら、お互い、親神様に働いていただけるように、しっかりと、そして素直に、教えを心に治めていかなればならないと思った」と述べられた。

また、時代が変わり、周りの状況が変わっていく中で、どのように丹精するかということを、怠（おこた）ってきたのではないかと指摘。いくら布教したところで、丹精ができなければ何にもならないとして、「地道に丹精するということ。それは、いつに変わらずし続けなければならないことであったが、いつの間にか、それがおろそかになっていってしまったのではないか」「今の姿のうえに立って、私たちには目指すところがあるので、そこへ向かって歩んでいかなければならない」と強調された。

最後に真柱様は「どうぞ今年も、元気につとめてくれますように」と、あいさつを締めくくられた。

（『天理時報』第4692号）

昨年は、コロナに翻弄された1年でした。それを踏まえて、信仰を見つめ直すいい時期を与えられたように思います。

そのうえで、今年1年の通り方が大切だと思いますので、共々に心一つに揃えて勇んで成人の歩みを進められるように、今年1年の動きについて、お

話しします。

▼基本づくりから再出発するとき

表統領先生のあいさつに「陽気ぐらしの道を堂々と歩める基本づくりから再出発するとき」とありましたが、正しく、今年の活動目標はそこにあります。

信仰の元一日を思案しながら、今までどおりで良かったのか、今していることが本当に正しいのか、確認しながら進めることが大切だと思います。

「再出発」という言葉の意味のうえにおいても、今年の活動目標が、それにちょうど相応しい歩みになっていると思います。

3年目の今年、新たに、活動目標「一人ひとりの信仰生活の充実～プラスαを目指して～」を加えました。

実践項目は「教会に参拝し、おぢばの理を戴こう」と「心を込めておつとめをしよう」です。

これを聞いて「何と当たり前のことを、当たり前に言うんだな」と思われた方も多いかと思います。

でも、当たり前のことが、果たして、本当に、当たり前のこととしてできているかどうか。ただ流されてしているだけで、そこに一つひとつの意味を持たせながらつとめているかどうか。

――教会への参拝が親神様・教祖にお喜びいただけるような姿になっているか。また、おつとめすることが、果たして、親神様・教祖にお受け取りいただいて、たすけ一条のうえに十分にお働きいただける姿になっているか。

――あらためて、思案しましょう。

▼教会に参拝し、おぢばの理を戴こう

一回でも多く教会へ参拝する。参拝の頻度を増やす。人を誘って参拝する。初参拝者を教会へ誘う。家族揃って教会へ参拝する。ひのきしんや教会行事に合わせて参拝する。所属教会が遠方で頻繁に参拝できない場合は、近くの教会への参拝を促す。日参を薦める。教会長やその家族は上級や大教会へ参拝する。――と、参考例を挙げていますが、あらためて、教会に参拝することの趣旨を確認しましょう。

教会へ参拝するとはどういうことなのか。――教会がどういうところかを考えれば、自ずとその意味が分かりますが、教会は、ぢばの理のお許しをいただいて、親神様・教祖がお出張りくださる場所ですから、それ(教会)に参拝するということは、教会を通しておぢばに参拝し、そして親神様・教祖に心を繋ぐことだと思います。

ただ教会に参拝したらそれでいいのではなく、教会に参拝するときに、常におぢばをイメージし、そして親神様・教祖に心をしっかり繋ぐことが大切ではないでしょうか。果たして、参拝を通しておぢばに心が繋がっているかどうか、あらためてしっかりと思案しなければなりません。

そして、そのことを、それぞれの教会に繋がるよふぼく・信者に徹底することが大切です。「教会に参拝しよう」というと、ややもすると、自分がしていればいいというふうになりがちですが、そうではなく、一人ひとりが、「せっかく参拝するから、一緒に参拝しよう」というように誘い合うことも大切ではないかと思います。

▼心を込めておつとめをしよう

親神様・教祖にお受け取りいただくようなおつとめになっているかどうか、あらためて思案しましょう。

親神様・教祖にご覧いただくお手を振るわけですから、お受け取りいただけるように、お手を振り、鳴り物をつとめましょう。

せっかくつとめているのに、いい加減なおつとめになってはいないでしょうか。――これは「理を振る」と教えられるお手ですから、本当に「理振り」になっているか。21回同じことをするにしても、一つひとつ、ちゃんと心を配り、親神様・教祖、ぢば一つに心を繋ぎながら、お手を振っているかどうか。これをしっかりと心においてつとめるとことが大切だと思います。

「おさづけをいくら取り次いでも、なかなか、ご守護が見えない」というようなことをよく聞きますが、おつとめが「たすけの元立て」ですから、おさづけが効くも利かないも、おつとめをしっかりとつとめることが大切ではないかと思います。

教会の祭典報告書に、なかなかおつとめの手が揃わない、鳴り物の調子が揃わない、何とかして揃えたいというようなことも書かれていますが、一人ひとりにおつとめの大切さをしっかりとお話しして、おつとめをつとめる皆が同じ気持ちでつとめれば、自然と手が揃い、鳴り物の調子が揃うということに繋がってくると思います。

おつとめを、ちゃんとつとめられれ

ば、親神様・教祖のお働きは十分にいただくことができます。――少なからず、それぞれの教会で、おつとめをつとめているからこそ、親神様・教祖が十分に働かれ、コロナに掛かっても軽症で済んだり、重症の人が退院することができたり、それ以外の身上でも同様によくなる。――親神様・教祖が働かれるその元は、私たちがつとめているおつとめ次第、おつとめをつとめているからこそ、そうしてお働きいただくことができるのです。

あらためて、おつとめの大切さを心におきながら、なぜ教会に参拝するのか、なぜ心を込めておつとめするのか、しっかりと基本に立ち返って、心を素直に持って、一つひとつの実践に取り掛かりましょう。

声掛けの大切さ述べられる大教会長様

▼神様に心を繋ぎ、常に声掛けを

さらに思案を重ねると、おつとめによって親神様・教祖が働かれるのは、飽くまで身上・事情までで、「病の元は心から」と教えられる、その本元である心については、残念ながら、おつとめだけではたすけられません。心の自由を許しているがために、神様には人間の心を変えることができないからです。

つまり、おつとめを通して、身上・事情はたすけられても、その本元の心は、いくら親神様・教祖でも変えることができない。

では、心そのものを変えるためにはどうすればいいのか。そのためには、2つの実践項目（私たち一人ひとりの声掛け、ならびに行ない）が大切です。

――私たちが、しっかりと声を掛けることによって、その人の心に触れ、その人の心を変えることができる。

もちろん、声の掛け方によっては、良くも悪くもなりますから、心が良い方向に変わるような声掛けをしなければならないわけで、そのために、正しく教会に参拝、つまり、神様にしっかりと心を繋いでおくことが大切だということです。

自分の「たすけたい」という思いだけで声を掛けてみても、自分の「たすけ」にしかならず、良い方向へ心を変えることにはなりにくい。私たち一人ひとりが、しっかりと、おぢばに、親神様・教祖に、心が繋がっていなければ、良い方向に心を入れ替えることはできない。だからこそ、「教会に参拝」が大切なのです。

当たり前のことかも知れないことを、単なる当たり前ではなく、しっかりと親神様・教祖に繋がった当たり前のことにしていかなければいけないということです。あらためて思案して、間違いなく、教会に、上級に、大教会におぢばに参拝し、しっかりと心を繋ぐ。そのことを心においてつとめてほしい。

「声掛けが大切」と申しました。教会へ参拝するのも、ただ自分一人が参拝するだけではなく、周りにいる人に、「一緒に参拝しよう」と声を掛けて参拝したなら、それも神様が受け取られ、こちらの声掛けが、その人の心さえをも切り替える声掛けにもなってくるのではないでしょうか。

子供・孫・曾孫や夫・妻や親戚・友だちや誰でもよろしい。常に声掛けしながら、教会に参拝しましょう。

声を掛けても参拝されない方も当然おられます。でも、そうして、しっかりと教会に繋がり、心がしっかりと神様に繋がって声掛けすれば、必らず、今度は、神様が働いて、その人の心を変えてくれる、そのきっかけになります。

あらためて、この声掛けの大切さ、しっかり、心においてほしいと思います。

▼私たちの「心定め」をしっかりと

おつとめをつとめるうえにおいて大切な心遣いは、先ず「お礼」、次に「心定め」、そして、「お願い」は、その後です。

今の時期ですから、多くの方が、コロナが一日も早く終息するようにとお願いするでしょう。

しかし、あらためて考えると、コロナは、神様が、人間を苦しめよう懲らしめようとして現わされたものではなくて、これは、元々あったものです。

それが人間にうつって、人間が苦しむようになったのは、本当に最近のことですが、そういう形になってしまった原因は人間にあります。

私たちがしたことに対して、神様にお願いしても、どうしようもありません。この体自体は神様からのかりものですから、願えば、何とかはしてもくれましょうが、神様がされていないことを頼んでみても、神様もどうしようもできません。

とするなら、神様にお働きいただく方法は何か。――先ず、日々の「お礼」、かしもの・かりものの「お礼」をしっかりと申し上げ、「この身上・事情をご守護いただくために、私たちが、こういうふうにしっかりと心を入れ替えますから、神さん、何とかお働きください。」と「心定め」、次に「お願い」というふうにしなければならないと思います。

▼率先して「たすけ合い」を実践する旬

特に、コロナに関して、考えなければならないのは、「たすけ合い」ということではないでしょうか。

世界中の人が、本当に、どんな中でもたすけ合うという心になっていたら、コロナもそんなには広がっていなかったはずです。

特に若い人は、「どうせ、自分は罹（かか）っても大して悪化しないから、罹っても構わない」と、自分が罹っていることも分からない。罹っても症状も出ない人もいるし、罹っていることが分からずにいろんな人に触れて盛んになっているのがクラスター、特に家庭内クラスターです。罹っていると分かったら、家の人に迷惑が掛かるから家に近づかないでしょう。でも、そういうものが発生するということは、罹ったことを全く知らない。自分は関係ないと、知らず知らずにうつしてしまっている。

そうではなく、一人ひとりが気を付けて、自分が罹っているかもしれないから、ひとにうつさないように、精一杯の努力をするというような、皆がたすけ合いの気持ちを持ったなら、ここまでは広がることはなかったはずです。

つまり、互いにたすけ合うことが大切だということに気付いていかなければなりません。

そして、これは、多くの人がそれに気付きつつある。例えば、東京都知事や医者が「うつさないように、うつらないように」と言っています。

普通なら「うつらないように、うつさないように」と言います。つまり「先ず自分がうつらないように。で、もしうつってしまったら、ひとにうつさないように」。普通ならそう言うはずです。

でも、敢えて「うつさないように」を先に言っているということは、たすけ合いが大切だということに気付いてきている証拠です。

世間の人は、気付きつつあります。でも、残念ながら、まだ、多くの人が「自分が」が先になって、「ひとに」が後回しになってしまっているのが現実です。

ならば、私たちが、２つの実践項目を通して、率先して、声を大にして「たすけ合いが大切だ」と皆に知らしていく必要があるのではありませんか。

▼正に、時代に求められている活動

今、大教会では、130周年記念祭・会長就任奉告祭に向かって三年千日と仕切って成人の歩みを進めています。１年目・２年目済まして、いよいよ仕上げの年。

「仕上げの年に、何と当たり前のことを打ち出すのだな」と思うかも知れませんが、この三年千日の打ち出しと同時にコロナが出てきたということで、少なからず記念祭の問題だけではありません。

「教会へ参拝しましょう」と声を掛けて、一緒に参拝してください。「おつとめをしましょう」と、一人でも多くの人に声を掛けてつとめましょう。そうすれば、自ずと、「百万件にをいがけ」・「初席者一名」にも、「おさづけを身近に」にも繋がってきます。すべて「声掛け」から始まっています。

決して、３年目だけの活動目標ではありません。３年間通しての総仕上げの活動目標であり、そして、記念祭に向けての歩みが、今、正に、時代に求められているところの歩みです。

そのことを、しっかりと心において、共々に、今年一年、精一杯、成人の歩みを進めましょう。

どうぞ、よろしくお願いします。

《以上要旨》

春季大祭講話

教勢の伸展のご守護をいただく大きな節

世話人　島村廣義先生

立教184年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よふぼく・信者ら参拝のもと執り行われた。

ご参拝くだされた世話人・島村廣義先生は、教祖がお姿をお隠しになった明治20年のことが、明治7年のおふでさきにあらかじめ書かれていたとして、明治7・8年当時の道の動きについて詳しく話された。

続いて、直面する数々の節が「明治20年の節とかぶっている」として、「教勢の伸展のご守護をいただく大きな節」であると、私たちの、今年1年の歩みを鼓舞された。要旨は次の通り。

ただ今は、笠岡大教会の春季大祭、滞りなく、また勇んでつとめられ、誠におめでとうございます。「おめでとう」というのは、ちょっと、場違いかも知れません。滞りなくつとめ終えましたので、本日、参拝の機会に、今の旬の思案をお話しします。

新年のあいさつが頭にあって、「おめでとう」と失言しましたが、今日は、教祖がお姿をお隠しになられたことを祈念してつとめる祭典ですので、「おめでとう」は言わないことになっています。

▼春季大祭の意義

今日のお祭は、教祖がこどもの成人を急き込まれるうえから、25年先の定命を縮めて、存命の理をもって働かれるようになった元一日を祈念してつとめるお祭です。

教祖が、なぜ、姿をお隠しになって、そして、存命の理をもって働かれるようになったのか。――おつとめをつとめると、教祖にいろいろご苦労をお掛けすることになることを慮って、初代真柱様と親神様と49日間にわたって問答を繰り返されながら、お仕込みを頂戴されましたが、お姿があるがためにおつとめがつとめられないのならということで、姿を隠し存命のお働きをもって導かれることになったと思います。

お姿をお隠しになることによって――たすけ一条のため、陽気ぐらしの世の中に立て替えるために教えられたおつとめを、誰気兼ねなくつとめられるようになり、何気兼ねなく布教ができる。また、広くおさづけの理を渡されるようになり、土地処に教会名称の理を許されるようになりました。

このことは、明治20年の出来事ですが、その13年前、明治7年におふでさきをもって、あらかじめ、教えられていました。

十一に九がなくなりてしんわすれ
正月廿六日をまつ　三・73

このあいだしんもつきくるよくハすれ
にんぢうそろふてつとめこしらゑ　三・74

というお歌ですが、「このお歌は教祖様が現身をおかくしになることを示されたもの」だと註釈されています。

当時、教祖を目標として、社会の迫害・干渉が厳しくなる。そういうことでは道が遅れるから、教祖は25年先の定命をお縮めになって、姿を隠され、世間の圧迫を除いて、道を広める模様立てをされた。そして、それまでに、真柱も定まり、かんろだいも建築されるから、皆々の心を澄まして、早く、人衆揃うてつとめの仕拵（しこしら）えに取り掛かるようにせよとお諭しになったお歌です。

しかし、当時の先生方は、このお歌が意味するところを知るはずもなく、後日、

さあく正月二十六日と筆に付けて置いて、始め掛けた理を見よ。さあく又正月二十六日より、やしろの扉を開き、世界ろくぢに踏み均しに出て始め掛けた理と、さあく取り払うと言われてした理と、二つ合わして理を聞き分けば、さあく理は鮮やかと分かるやろ　（M22・3・10）

というおさしづによって初めて、このお歌が、教祖がお姿を隠されることを、既に予言されていたと分かりました。

このお歌を示された明治7年、翌8年は、お道にとって大変重要な意味を持った年です。

真柱を定めることを急き込まれたのが明治7年、

このたびハうちをふさめるしんばしら
はやくいれたい水をすまして　三・56

と示されています。

そして、おつとめの模様立てをどんどんと進められました。前川杏助様に依頼されたかぐら面を迎えに行かれ、

初めてお面を着けておつとめがつとめられた。しかし、この時点では、ぢばが定められていませんので、正式なおつとめにはいたっていません。

明治8年にぢば定めがなされ、明治10年に女鳴り物等を教えられ、おつとめの模様立てが調（ととの）っていきます。

明治7年は、こうしたおつとめの模様立てとともに、教祖が積極的に高山布教を打ち出され、道を広める、世界に知らしめるために、積極的に行動されました。

「大和神社へ行き、どういう神で御座ると、尋ねておいで。」（伝六章）

と教祖の方から、積極的に社会に対して働き掛けられますが、大和神社の事件に引き続いて、教祖ご自身が山村御殿へご苦労されるという一つの節が出てきます。このとき、

「親神にとっては世界中は皆我が子、一列を一人も余さず救けたいのや。」（伝六章）

と思召され、積極的なおたすけを発動されるのが、明治7年です。

しかも、このことがあって後、教祖は、赤衣をお召しになって、そして、ご自身が「月日のやしろ」であることを、厳然と目の当りに示される。そして、また、

このあかいきものをなんとをもている
なかに月日がこもりいるそや　六・63

と仰せられ、赤衣様のお召しおろしを、お守りに調整して「証拠守り」として出されるようにもなります。

そして、

一に、いきハ仲田、二に、煮たもの松尾、
三に、さんざいてをどり辻、四に、しっくりかんろだいてをどり桝井、

と、四名の者に、直々、（伝六章）おさづけの理を渡されるようになります（これは、いわゆる、今日、私たちが頂戴している、身上たすけのおさづけの理です）。

そして、おさづけの理とともに、「お屋敷に勤める人々の心の置き所（伝六章）」を数え歌式にして教えられたのが、この明治7年です。

この7年・8年の出来事を思案すると、いかに、教祖が積極的におたすけに打って出ておられるか、そして、自らは「月日のやしろ」におわすことを目の当りに示しながら、私たちに、おたすけの手立てとして、おさづけの理を渡されるようになる、また、お守りも下附されるようになりますが、一番大事なことは、つとめの模様立てを整え、おつとめを急き込んでおられることです。

このことが予言されて、明治20年にいたります。明治20年の49日間の問答が、本当に、教祖50年のひながたを凝縮し、集約したものであるとまで仰せられますが、一つに、おつとめの勤修、そして、積極的なおたすけ、そして、何よりも大切なおつとめをつとめる私たちの心意気＝「神一条」のあり方というもの・精神を、諄々と仕込まれました。

これが、今日、春の大祭をつとめる意義であり、意味合いです。これを、私たちはしっかり心において、この春の大祭をつとめなければならんと思います。

明治７年頃の道の動きを
詳しく話される世話人・島村先生

▼節々から思案すべきこと

さて、年改まって、今年も真柱様が年頭のごあいさつにお出ましになって、いつもより少し時間を取って、いろいろと仕込まれました（前掲の『天理時報』と重複する部分は割愛）。

始めに、真柱様ご自身のご身上の現状を話され、私たちのつとめは、親神様のお力をいただかないことには進めていくことができない。お互い、親神様に働いていただけるように、しっかりと、そして素直に、教えを心に治めていかなければならないと話されました。

そして、今まで為してこられた名称の解消について言及され、前真柱様の時代に、2・3ヶ所の御目標様をおぢばにお帰りいただいて名称を解消したことがあったかも知れないが、今日、解消する数がだんだん増えて、申し訳ないような状態だ。「教会名称の理は末代の理」だからといって看板だけ残し、それが結果として却って理を汚すようなことになっては、それもまた、親神様に対して申し訳ないと判断した

と仰せになり、教祖130年祭活動に入る前に、10年以上無担任の教会については御目標様におぢばへお戻りいただくようにということで、御祈念解きされて教会解消となりました。

それから昨年までに、無担任教会がさらに増え、しかも、その中で、理のお許しをいただいた場所に親神様・教祖の御目標様がお祀りされていない（会長がおらず、そして、御目標様をお守りするよふぼく・信者がいない教会なので、上級や大教会へお遷ししている）教会は、同様に解消となりました。

今では、「統合」ということを、表統領も仰せられ、教会を活性化する――力のないというか、教勢の伸展を望めないところについては、兄弟教会・上級教会と一緒になって、互いにたすけ合って、教会活動を活性化させる――「統合」ということで、その整理に掛かられています。

真柱様は、教会は、設立したいというそれぞれの願い出に対して許されたものであり、その理は末代だと仰います。しかし、「末代」という年限からすると、今、古いところでも140年になりませんから、「教会を返します」と言えば、親神様からご覧になれば「自分から願い出ておいて、舌の根も乾かん内にもう返すのか」ということになる。だから、これは偏に、丹精不足に尽きると思う。もともと、明治20年の、教祖が存命の理をもって働かれるにいたるまでの親神様との問答の中に、「教会本部をお許し下された上は（伝十章）」というくだりがあり、「いかようにも親神の仰せ通り致します。（同）」という心定めを私たちの先人がして、その心定めは今も生きているということを心に刻んで、しっかり、それぞれの道の中でのつとめを果たせるように努力していくことが大切であると話されました。

教会の初まりは私たちの側から願い出て、「末代の理」としてお許しいただいたものです。

しかし、現実は、このように、本当に申し訳ない状況ですが、これを、とにかく、何としてでもご守護いただいていきたいと、昨年、表統領は、全教の主立つ方々を集めて、これからの道のあり方について、いろいろと話されました。その中で、教祖150年祭・立教200年祭という1つの大きな節に向かって、これからお道を立て直していこうと、仕切って、全教に呼び掛けられました。

それに向かって、先ずは教祖140年祭に向けて、しっかり、教祖にご安心いただけるような姿になれるよう、また、150年祭に向かって、飛躍的な道の伸展をご守護いただけるように、頑張ってつとめよう。また、今の節は、正しく、明治20年の節とかぶって心受け止めていると話されました。

コロナのことも、原典（おさしづ・おふでさき）の中では「コレラ」・「疱瘡」・「ペスト」のような流行病（はやりやまい）を台にして諭されていますが、これらの感染症は、親神様の残念な気持ちの現されたもので、何が残念かと思案すると、私たちのおつとめのつとめ方が心に掛かる。また、教会の活動というものを考えてみても、こうして見せられる教会事情も大きな節です。また、自然災害も、親神様の残念な姿をお現しになったものだと教えられます。

教内的に言えば、かんろだいに見せられた事情、そして、我々の道のをや＝真柱様のご身上を通して仕込まれる親神様の思召をしっかり思案しながら、それにお応えする道を心定めて通らなければならない、今は、大事な旬だと悟らせていただきます。

▼大節を台にして

そういうえで、今年は、笠岡としては、正しく130周年という節目を迎えますし、それを1つの台として、吉祥として、会長も、新たに定めをいただき、新しい会長を芯にしてスタートを切ります。

教会への参拝と、おつとめということについては、おつとめをつとめる私たちの心、神一条の精神をしっかり定めて、人々のたすけを願い、世の中の治まりを願うて、真剣におつとめをつとめる。神一条の精神をしっかり定めて、おたすけに掛かる。これに尽きると思います。

そういうえで、今年は、笠岡としても、これを台にして教勢の伸展のご守護をいただく大きな節になると思います。

教祖がお姿を隠されて後、存命の理をもって働かれるようになり、尊いおさづけの理を渡された。それをもって、先人たちは、燎原の火のごとくおたすけに奔走され、凄い道の伸展のご守護をいただいた。その先人たちの歩みに負けないよう、私たち自身も、今、見

せられるいろいろな大節を台にして、教勢の伸展のご守護をいただけるよう、教祖にお喜びいただけるよう、精一杯、つとめることを誓い合って、今日のお話しを終わります。

《以上要旨》

直轄委員部長・委員研修会　開催

婦人会

婦人会笠岡支部（上原きよ子支部長）は2月3日、大教会で直轄委員部長・委員研修会を開催、27人が参加した。

午前9時30分から座りづとめ・支部長のお話し・ねりあいがもたれた。

婦人会長様の思いを話される支部長

支部長は年間活動方針・婦人会長様の思い・本年度の活動と創立130周年記念祭に向けて委員・委員部長としての役割・責任についてお話しくださり婦人会にかける親神様の思いをふりかえらせて頂きました。

本年は、コロナ禍ということもあり、午前で終了しました。

毎年婦人会本部から頂く活動目標に対して本年は支部毎でご恩報じを年頭に具体的活動の角目を相談するということで笠岡大教会としては大教会の活動目標の底力とならせて頂こうと大教会の目標に「いつもにこにこ婦人会」を加えこの一年心揃えてつとめさせて頂こうと話し合いました。

（常任委員　中村理恵）

陽だまり56（2）

ビエン・J・K

あと僅かで、東日本大震災から10年が経過します。時の経つのは本当に早いものですね。平成24年3月8日付朝日新聞の一面に、非常に興味深い記事が掲載されました。それをもとにして拙文を書いたことがあるのでご紹介したいと思います。

「偶然が最悪を救う」

昨年3月11日、東日本大震災が発生し未曾有の被害をもたらした。テレビでは連日、信じられないような大惨事が映し出され、だれもが胸がつぶれるような思いであった。さらに津波に襲われた福島第1原発では、絶対に起こらないとまで言われていた〝原発事故〟が起こり、緊迫した状況が連日報道されていた。地震発生の翌日から3日間、本部神殿で正午を期して、真柱様が拍子木、前真柱様が数取りで、被災地の一日も早い治まりの「お願いづとめ」が行われ、関係者をはじめ、ようぼく・信者が多数駆け付け、礼拝場を埋めた。

この時、私たちの耳目は運転中に恐ろしい事故が発生した原発の1号機から3号機に引かれていたが、実はそれよりももっと恐ろしいシナリオが同時に進行していたというのだ。今年3月8日、朝日新聞の1面に次のような記事が掲載された。

「偶然が『最悪』救う・福島第1原発4号機」　以下記事を要約すると――

東京電力福島第1原発の事故で日米両政府が最悪の事態の引き金になると心配したのは、点検中だった4号機の使用済み核燃料の過熱・崩壊だった。核燃料プールの水は事故による燃料の崩壊熱で蒸発していた。このまま水が減り続け核燃料が露出して加熱すると、大量の放射線と放射性物質を放出。人は近づけなくなり、福島第1だけでなく福島第2など近くの原発も次々に放棄せざるを得なくなり、首都圏の住民まで避難の対象となる最悪の事態につながると恐れられていたのである。し

かし実際には、原子炉ウェルに普通なら無いはずの大量の水が残っていたのだ。しかも隣の核燃料プールとの仕切り壁が偶然にずれて〝できるはずのない隙間〟がそこにでき、プールに約1千トンの水が流れ込んだとみられることが後に分かったというのだ。原子力安全・保安院の幹部は「神様がいるとしか言いようがない」と話している。

もし、その水が核燃料プールに流れ込んでいなかったら…。「偶然が『最悪』救う」とタイトルには書いているが、果たして本当にそうだったのだろうか？ 私には、決して偶然だったとは思えない。

※平成24年陽気10月号「陽だまり語録」より著者転載

◎ブログ版「陽だまり語録」をご覧になりたい場合は、スマホやパソコン等で「陽だまり語録」と検索されるか、下記アドレスを入力してください。

陽だまり語録

https://hidamarigoroku-vjk.localinfo.jp/

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様には「人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたい」との思召からこの世と人間をお創造（はじめ）になられただけでなく 今尚自由のお働きを通してご守護とお導きを下さっております しかしながら心の自由もお許し下さっている為に使い方を誤り 互いに傷つけ合い身上事情に苦しんでいるのを哀れと思召され 陽気ぐらしへの「ひながた」をお示し下されると共に 「ひながた」を通る為に「おつとめ」をお教え下さり「おさづけ」を下さいました事は誠に有り難く勿体ない極みでございます 私共は日々朝に夕にと御礼を申し上げつつ 陽気ぐらし実現を目指して 御教え通り「おつとめ」を勤め「おさづけ」の取り次ぎに励ませて頂いております

その中でもこの月二十六日は 教祖が私達の成人を促す為に御身を隠し「ろくぢ」に踏み均しに出られた尊い忘れ得ぬ日柄でございますので おぢばで春の大祭が執り行われますが 当大教会でも理のお許しを戴いて本日只今より おつとめ奉仕人一同 たすけ心と喜び心を一つに睦び合って 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりを勤めて春の大祭を執り行わせて頂きます 今日の吉日を楽しみに又コロナ禍の中神一条に寄り集いました道の子供達が 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げると共に「たすけの輪」を広げる事をお誓い申し上げコロナ禍の一日も早い終息を願う 皆の真実の状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本日は 世話人島村廣義先生にお越し頂いておりますので 後程時旬に当たってのおぢばの思いをお聞かせ頂き本年の成人の歩みの指針とさせて頂く所存でございます 又本年は大教会創立百三十周年記念祭並びに六代会長就任奉告祭を執り行う年で 三年千日と仕切っての仕上げの年でございますので 「一人ひとりの信仰生活の充実」を図るべく「教会に参拝しましょう」と「心を込めておつとめをしましょう」を実践項目に掲げて成人の歩みを進めて行く所存でございます 今月直轄教会の大祭参拝をさせて頂きその徹底を図ると共に 部内のよふぼく信者まで徹底すべく 部内の会長には大教会巡教員のつもりで自教会で話をし又実践して貰うようお願いをさせて頂きました コロナ禍だからこそたすけの輪を広げなければならないし 広げる為にしっかりとおぢばに心を繋ぎ親の心の橋渡しをさせて頂く所存でございます

何卒親神様には コロナ禍の中でもよふぼく信者の役割を自覚し 出来る精一杯のたすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に自由のご守護を賜りたすけの輪が広がって コロナ禍も収まり 安心して陽気ぐらしを謳歌出来る世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

笠岡大教会創立百三十周年記念祭
六代会長就任奉告祭

立教184（令和3）年10月24日

スローガン

陽気ぐらしを目指して、たすけの輪を広げよう

①一回でも多く教会へ参拝する－参拝の頻度を増やす
②人を誘って参拝する－初参拝者を教会へ誘う
③家族揃って教会へ参拝する
④ひのきしんや教会行事に合わせて参拝する
⑤所属教会が遠方で、頻繁に参拝できない場合は、近くの教会へ参拝する
⑥日参をする　⑦教会長やその家族は上級や大教会へ参拝する

＊教会に参拝しましょう

＊心を込めておつとめをしましょう

①一日の始まりと終わりにおつとめをつとめましょう
②教会の月次祭に参拝しおつとめをつとめましょう
③教会でのお願いづとめに参拝しましょう
④定期的におつとめ練習をしましょう

活動目標

☆一人ひとりの信仰生活の充実
～プラスαを目指して～

☆百万件のにをいがけ
☆おさづけを身近に

立教百八十四年 春季大祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	門脇元教
	上原志郎

講話	島村廣義先生

賛者	高木昭祥
	渡邉隆夫
指図方	吉岡寿

三月講話	横山逸郎

役割＼区分	坐り勤	前半	後半
地方	田中隆之	今川昌彦	上原浩
	三島渉	虫明立生	森本忠善
	山田敏教	佐藤真孝	岡田誠
おつとめをどり	大教会長様	門脇元教	田中隆之
	上原繁道	中島誠治	岡﨑真一
	吉岡寿	吉岡誠一郎	山野弘実
	大教会奥様	武内正美	門脇加津
	上原愛美	高木孝子	中村初美
	田中ますみ	山野なつ	田中つかさ
笛	上原浩	上原繁次	佐藤真孝
ちゃんぽん	佐藤道孝	高木昭祥	渡邉隆夫
拍子木	岡﨑真一	岡田誠	上原志郎
太鼓	山野弘実	内海史郎	中村道徳
すりがね	中村剛	森本忠善	山田敏教
小鼓	中村道徳	赤木素志	三代温生
琴	虫明好美	佐藤香苗	笹尾一美
三味線	上原順子	岡﨑和美	内海安子
胡弓	今川佐智子	岡﨑豊子	三島照美

訃報

下田孝徳氏
行滕分教会長
2月4日出直されました。
享年　87才

北川勇氏
稲倉分教会前会長
2月9日出直されました。
享年　93才

よりみち

過日、スクラップブックを整理していたら、古い朝日新聞の切り抜きを見つけた。そこには、アメリカの大統領リンカーンとケネディについての興味深い話が記されていた。以下、「天声人語」から引用。

『リンカーンが米国の大統領に選ばれたのは1860年、ケネディは1960年だった。二人のあとの大統領はいずれもジョンソン。1808年生まれと、1908年生まれだ▼リンカーンを暗殺したブースは1839年生まれ。ケネディを暗殺したオズワルドは1939年生まれ。二人とも裁判にかかる前に別人に殺された▼リンカーンの秘書(名はケネディ)もケネディの秘書(名はリンカーン)も、暗殺されることになる場所に行かぬよう大統領に進言していた。ブースは劇場でリンカーンを撃って倉庫に逃げ込んだ。オズワルドは倉庫からケネディを撃ち、劇場に逃げ込んだ…▼世の中には様々な偶然があるものだ。』これは、よく知られている話だそうだが、私はよく知らなかったので驚いた。世の中には、確かに不思議な話があるもんだ。（V）